

鈴木雅博町長に聞く

誇りあるまちづくり

昨年10月に3期目の再選を果たした鈴木雅博町長。これまでの2期8年を振り返りながら、これからの新たな4年の施策への抱負を語っていただきました。

コロナ禍の再選ですが、現在の町政に対する率直なお気持ちや意気込みを教えてください

未曾有のコロナ禍に見舞われてから2年以上が経過しましたが、

いまだ収束の見通しがたらず、この先の施策に関しても正直先が見えない状況です。今しばらくは、引き続き新型コロナウイルス感染症への対策と伴走する形での町政運営となると思います。ただただ、町民の皆さんが感染することのないよう、健康をお守りすることが使命であると考えています。そのために町民の皆さんにも忍耐を強いたり、ご不便をおかけしたりすることも多々あるかと思いますが、

今しばらくのご辛抱をお願いしたいと思えます。



▲集団接種会場（中央公民館 集会室）



平成28年に策定された大口町の「第7次総合計画」が続行中ですが…

「第7次総合計画」は、平成28年より始まり6年がたちました。「若い世代の定住・子育て支援」「健やかな暮らしづくり」「活力ある産業づくり」の3本の柱を掲げています。

第1の「若い世代の定住・子育て支援」では、西保育園の増改築をおこない、保育士を増やし、乳児・幼児の受け入れ人数を増やす体制を整えました。また、「子育て世代包括支援センター」を充実させ、多様な子育て団体との連携もはかり、妊娠・出産から子育てへの支援を切れ目なく有意義なものにするよう努力して



▲増改築した西保育園

います。

第2の「健やかな暮らしづくり」においては、今は何よりコロナワクチン接種の推進が第一ですが、そのほかにも健康寿命を延ばすことに力を入れてきました。高齢者の皆さんが一日でも長く、健康的に楽しく自分の力で生活できるよう、担当部署による啓発活動を進めています。

第3の「活力ある産業づくり」では、いわずと知れた「工業のまち」大口町の基盤を今まで以上に整えるため、国道41号の6車線化、国道155号の4車線化を中心とし、各町道も車道拡幅や歩道整備に力を入れ、渋滞の解消や交通安全につながるよう努めてきました。

これまでの2期8年を振り返れば、いまだ志半ばの感が否めないのが正直なところ。50年先、100年先の大口町がよくなるよう、目先のことにとらわれず大きな視野でこれからも全力で取り組んでいくつもりです。

他の市町にはない大口町の「良いところ」は、ずばりどこだとお考えですか？

ほどよく「田舎」であることでしょうか？正直、愛知県民でも大口町がどこにあるか知らない人は多いし、名物や観光地も誰もが知っている「これ」というものはない。けれど、大口町には国道という大動脈が2本走り、名古屋へも約20分で出られる大いなる「田舎」です。春は桜並木や青々とした田んぼ、秋は黄金色の稲などの美しい景観がこれほど身近で見られる「ほどよい」田舎は貴重なのではないのでしょうか。わずか50年前には何もなかったところから、初代町長の社本鋭郎氏が知恵と



工夫をこらし、企業を誘致することで自立した豊かなまちへと変身させてからも、変わらず美しい風景を残してこられたことは町の誇りだと思います。自分も、大口町の良いところを大切に守りながら、より住みやすいまちにしていこうと肝に銘じています。



道路整備は、町長の掲げる政策の大黒柱

大口町は尾北地区の真ん中のまち。まちを人間に例えると、道路は大動脈だと考えています。血管がつまれば梗塞を起こします。道路整備は、常に周辺のスムーズな血の巡りを考えて進めています。扶桑町や、江南市など近隣市町から人々が安全に通勤通学でき、産業の発展のための物流もスムーズになるように考えて進

めてきました。正直やっつとここまで来たという心持ちです。常に「志半ば」という感覚で、長いスパンで考えています。この事業が完遂すれば、企業誘致もさらに積極的に行ける。絶えず将来を見据えて今やらなければならぬことを必死にやっています。と思っています。



▲国道41号（下小口5丁目交差点）

町長も、大口町生まれの大口町育ちですね

中学校までは大口町で学び、高校は江南市へ、大学は東京に出ました。そして、就職してからは大阪と博多を行ったりきたり。若いときにいろいろな都市での生活を体験して、大口町を外から冷静に見ることができましたよ。江南市の高校へ通ったときに、江南市はなんて都会なんだと思いました。その頃の大口は、文字

通り真つ暗でしたから（笑）。そして、東京、大阪と経験して、それぞれのまちが全然違うところだと思いました。その後、ふるさと大口へ戻ってきました。若い人には、ぜひ人生の中でいろいろなまちと出会って、自分のふるさとと比べてみてほしいですね。

未来を担っていく若い世代に望むことは

ご存じのとおり、大口町には中学校が一つしかないためか、同世代の仲間意識が強い。いつ誰と集まっても「同窓生」なわけで、自然と地元を愛する意識やふるさとを良くしたいという意識も強いように感じます。

を自分の言葉で表現できる人になってほしいですね。コミュニケーション能力は、異世代間交流につながっていくという意味でも。

それは素晴らしいことですが、それに加えて異世代間でも包容力や優しさを持ってもらえると、なお素晴らしいまちになると思います。

もう一つ望むことは、自分の考え

令和2年より、中学校の修学旅行は東京方面ではなく姉妹都市である松江市に行っています。大口町は、国宝松江城を築城した戦国武将堀尾吉晴公の生誕地であるご縁で、平成27年に松江市と姉妹都市提携を結んで6年半がたちました。それ以来、

中学生が授業で松江市のことを学んだり修学旅行で訪ねたりするようになり、だんだん想いが繋がってきたように感じています。姉妹都市である松江市は、なかなか自分では訪れることのない場所。大口町民としての思い出作り、話題作りのひとつとして、将来ふるさとを思い出すときに「修学旅行は松江に行ったね」と、同級生で盛り上がることのできるネタとしてもらえればと思います。



▲国宝松江城

大口町は今年、町制60周年を迎えました。記念すべき年は、どんな年になるでしょうか

いまだコロナ禍真っ只中であるため、大きな事業ができる見通しはたっていないというのが実情です。自然の流れの中で、町民の皆さんの沈んだ気持ちを和らげるような事業を少しでも実施できるとういのですね。

人生100年時代とよくいわれませんが、その言い方に当てはめれば、60年は折り返し地点を少し過ぎたと

ころ。目標に向かっていく過程であり、明日からも取り組みは続きます。その区切りの記念事業のひとつとして、ただ今「役場南ひろば」を整備中です。公園としての憩いの場としてだけでなく、災害時の緊急避難場所としても機能するひろばで、11月に完成予定です。また、併せて大口町の名所である美しい桜並木を

眺めることができる「花見橋」も令和5年3月に完成する予定です。万人にいいね、と思ってもらえる素晴らしいものができるといいです。楽しみにしています。



▲整備中の「役場南ひろば」

取材にて

「若い皆さんには、大口町で生まれ育ったということを感じてほしい。心の奥にしまっておいて、将来寂しいと思ったらいつでも帰ってきてほしい」と語る鈴木町長。「これといった名物は何もない」と語る一方、人と人との心のつながりは、どんな市町にも負けないという誇りが感じられました。人同士の密接な

接触を避ける生活が続く今日、それはどんな名物にも負けない「ふるさと」の宝物であるかもしれない。すべての大口町民が「自分のふるさととは大口町である」と胸を張って伝えるよう、みんなで心を通わせ、力を合わせてよりよいまちづくりに参加していきたいと背筋を伸ばして思いを新たにしました。